

Beppo —by G. G. Byron

楠 本 哲 夫

《Beppo》は Byron が みずからの詩風の転換を切望し 作為的に 試みて成功した作品である。

＜詩とは 人生批評、社会批評である＞と Byron は 明言した。

そして 大衆と共に生き 大衆の中に溶けあって、その生き態^{さま}を みずからの方寸のカメラに鋭くとらえ、その瞬間の映像を鮮烈に詩^{うた}い続けた。

《Beppo》は 澁みなく流れゆくバイロンの心の泉であり バイロン哲学の流露である。

この作品を

1. 《Beppo》が 詩^{うた}われた背景的考察
 2. Byron 詩における《Beppo》の位置づけ及び 詩風について
 3. 《Beppo》の構想^{プロット}について
- の観点から 概観する。

1. 《Beppo》が詩^{うた}われた背景的考察

1816, 4, 21 (28才) バイロンは 妻との合意別居証書に署名した。そしてドーバーからオステンドに向って 祖国を発ち 再び帰らざる、追放、流浪

の旅へと出かけた。

ナポレオンの皇帝馬車を擬した愛用の馬車を駆って 忠僕フレッチャー、医師ポリドールを随行させオステンドよりベルギーの首都 ブラッセル、ウォータールーを経て ライン河を遡り スイス、ジュネーブに着き デ・ジャン・ホテルに投宿、ここで シェリ（24才）と初めてめぐり合い 肝胆相照す仲となる。

ほどなくシェリがジュネーブ郊外レマン湖の東南岸に 農家を借りて移ったのでバイロンも後を追ひ、その家のすぐ上の地続きにあるヴィラ・ディオダティという美しい家をかりて シェリとの交友を温めあう。

シェリとレマン湖周遊の旅をたのしみながら《シーロンの囚人》、《チャイルド ハロールド 第三編》をかきあげた。

1816, 8, 28 シェリの帰国後 スイスを発ちイタリーに向い 11, 10 水都ヴェニス着、一先ず、セガティー家に落着く。この裕福な反物商の妻女マリアンナ（22才）は美しい、自由奔放な解放的女性で バイロンは電光石火、彼女と恋におち愛人とした。そして 姉オーガスタに手紙をかいている。

「私は22才の ヴェニスの女 と恋仲になりました。彼女は結婚しています。私も同様。だから、それは すこぶる趣旨に叶っています。彼女は少しもうるさくありません。したがって私ども 両人はアルプス以南における最も幸福な、かつ、非合法的夫婦です。この一ヶ月、私はすこぶる平静で愛にみちています。私を気狂いにした有徳面な悪魔アナベラから受けた過去二年間の拷問の苦痛も以前ほど私を苦しめなくなりました。呪よ、彼女の上にあれ。」

このマリアンナが 《Beppo》のヒロイン〈ローラ〉として紹介され 颯爽と登場してくる。

ヴェニスに到着以来バイロンの元気は〈はねっ返り〉を経験していた。夏の頃の〈憂鬱〉〈絶望〉は除々に消え 〈明るい〉〈活き活きた〉気持ちへと変っていった。それが手紙の中で 〈溢れる気持〉〈ウィット〉〈奇抜な洒落〉として吐き出され 詩化されていった。

この頃よりバイロンにとって自分の〈詩的ムード〉を変えるべき機は熟しつつあったと考えてよいだろう。しかしバイロン詩の中でこれまで長年育んできた バイロニック イメージとしての〈華麗なる憂愁〉の影を拭い去ることがどうしてもできなかった。そしてかなり苦しみつつ新しく 《マンフレッド 第三幕》《チャイルドハロールド 第四篇》を書き上げた。

しかしこの詩のもつ〈詩風〉が

1. 倦き倦きしたものとなりつつある
2. 詩についての自分の最も深い確信を満足させえない
3. 現在只今の自分のムードと一致しない

と云う自覚をバイロンは持つようになってきた。 12月14日ムーアに その心境を訴えて楽しいヴェニス生活にそえて長い手紙を書いている。

1816, 12, 26から南欧名物のカーニバルが始まりヴェニスの街は、街をあげて歓楽境と化して、特に夜は暗い街の中に仮面をつけた人々が踊り興じつつ酔いに乗じて戯れ歩くのだが、どっとおこる笑い声、さざめき、キスの音、絃歌の響き、全くいかめしい社会の戒律をよその別天地となる。 バイロンも若い愛人マリアンナを連れて夜も昼も歓楽に耽り いく晩も夜を徹し綿の如く疲れ遂にマラリヤの熱病に罹りカーニバルに続く精進節を病床に臥し更に翌年春までマリアンナの介抱をうけた。

《Beppo》は浮かれ騒いだカーニバルでのバイロンみずからの経験を映したも

のとして、ここから筆をとり始めている。そして北国に育ったバイロンにはこの南国の解放的カーニバルは初めての楽しい経験だったのでかなりエクサイトして 第1連から第10連まで更に脱線して99連中30連近くの部分を占めて長々とカーニバルのことを詩^{うた}いこんでいる。

1817, 4, 7 ローマへ旅立つ。その頃、ローマで古墳発掘をやっていたホブハウスから「温かいローマに來い」と招待状が届いたため、そして医師からの転地療養のすすめもあったからである。そして又 もう一つの理由として《チャイルド ハロールド 第四篇》を書き上げるためにはどうしてもローマを題材にしなければならないと気付いたからである。

途中 フェラーラでは詩人タッソーが七年間幽閉された地下室を訪れ 《タッソーの悲しみ》を詩っている。又、ルネッサンスの中心フローレンスに立寄りダンテ、ミケーロアンジェロ、マキアヴェリ、ガリレオ、ラファエル ゆかりの地を訪れ、これらを祀るサンタ・クロツェ寺院に詣でている。それから南下して 4, 29, ローマに入り 5, 19までの間、ローマに滞在した。

全世界に君臨したローマの荒廃を目のあたり見てポムペイ、シーザーをしのび、ロマンチスト、バイロンはほとんど毎日馬で街を見物して、詩情は泉の如く滾々と湧き出るのを覚えた。

見渡せば眼もはるかなり 荒寥の廢墟の姿
これぞみな 歴史の教訓^{おしえ} 太古よりくり返したる。
国民は^{くにたみ}＜自由＞に起こり＜光栄＞の幾世経ぬれば
＜富＞と＜罪＞＜腐敗＞かさねて 末ついに
あや目もわかぬ＜蒙昧＞の闇に 消えゆく

英雄の都に入り四千年史実を想い、筆を呵してローマの荒廃を賦した。

《マンフレッド 第三幕》もここローマで書き直した。

バイロンは マリアンナが恋しくなり、ホブハウスとローマを去って 再びヴェニスに帰る。 6月 ヴェニス郊外 ラ・ミーラで別荘を借りて《チャイルド ハロールド 第四篇》を書きあげて、浪漫詩と バイロンは 永久に訣別した。 この第四篇は <嘆息^{ためいき}の橋>で始まる流麗な筆致で始まっている。

水の都のヴェニスなる
 嘆息^{なげき}の橋に我立てば
 玉の宮居と牢獄を
 右と左に 望むかな

バイロンはこの《チャイルド ハロールド 第四篇》を自讃して<最高の出来栄>と述べているが 実はこの頃から、同時に、<この詩風でうたうのはもうすっかり種切れになってしまった> と吐き出すように自嘲のこぼれをみずからに、たたきつけている。

《マンフレッド》は うたう。

自らの術によって、よびよせた天地の諸霊に願をかける。

「語れ 人の子 汝が願い」と問いかけられ「忘れることが欲しいのじゃ」とポツリと答える。

《マンフレッド》は ゲーテの激賞した傑作であるが、その初版は「出来が悪いから書き直せ」とマレーはその改作を命じて バイロンは素直に応じている。徹底的に<我>をテーマとした作品であるが、 姉オーガスタへの絶ちがたい慕情、妻アナベラへの呪い、自分を追放した祖国英国への憎しみ、自分を生んだ祖先バイロン家の誇り、そして呪われたドス黒い悪血が身体中を流れ渦巻いていることへの想いに狂い悶えつつ詩った強烈な自己投影の作品である。 苦

しみ、あらゆる苦悩と悲哀に耐えぬき、みずからの生命を、みずからの手で絶とうとして処女峰^{ユングフラウ}をさまよい身を投げて、羚羊^{カモシカ}のハンターに救われるマンフレッドの姿は、祖国を追われたバイロンの苦悩の軌跡を、自ら鮮烈に生々しく描いた作品である。この作品を描いたバイロンは、たしかにみずからの詩作への行詰りを感じている。徹底した自己投影詩人としてのバイロンにとって＜詩作＞とは、己が心の、苦悩からの＜逃避の唯一の道＞であり、発狂を救うための＜一服のピル＞精神安定剤であったと考えるとき充分肯ける詩作低迷の苦しみであり、行き詰まりを どのように切り開くかを考え悶^{もだ}えてバイロンの苦悩の日々は＜只、忘れることを欲した＞ マンフレッドの独白のころであった。

《Beppo》は かくして バイロンが、みずから 切り開いた血路を、ここ南国で明るいイタリーの風土に新天地を求め、勇気をもって 自分の古い衣をすっかり脱ぎすてて 見事な一輪のバラとして開花させた作品である。

反逆児バイロンが祖国を追われた流浪の哀しさを、むしろ、明るい、茶の間の話題として《ベッポー》をきかせてくれたのは 読者にとって＜一服の清涼剤＞であり バイロン自身にとって＜解毒剤＞となった。そして、そこに、ちょっぴりの＜皮肉＞と＜笑い＞と＜ユーモア＞と＜機知＞を織りまぜて きかせてくれた。

《English Bards and Scotch Reviewers》を詩った、若き日の、血気にはやった、あの、ドギツイ、＜喧嘩バイロン＞の諷刺が、やがて1809年5月には、《^{どくろ}觸^ふ髅^るの賦》となってニューステッドの僧の亡霊が、その呪を 微笑^{にこ}やかに おおらかに 抑えて唄い始める。

君らのように	わしもまた
生きて恋して	酒をのみ
とどのつまりは	死にました

大地よ	わしの白骨を
秘むるをやめよ	なみなみと
酒 ^{そそ} 注がれんに	何の害
地中の虫は	君らより
けがれし	口をもつほどに

このバイロン自身への呪いと世間への諷刺精神が、《ベッポー》ではさらにしずかに 抑えられ むしろ、ユーモアと笑いと ウィットの明るさを 帯びてくる。バイロンの長かった 放浪の軌跡を《ベッポー》の中に はっきりと よみとることができる。

そして《Beppo》は 生いたちし少年の日々を、極限まで苦しみ、悲しみに耐えてきた バイロンが、青春の怒りを曝発させたのち、＜老いては 笑うが勝ちじゃ＞ と おおらかに、ゆったりと 明るく 笑いを絶やすことなく 唄い出すのであった。それが＜理想＞と＜完全＞を追求した バイロンの、そして《ベッポー》の詩心だった。

さて ラ・ミーラの別荘では ホブハウス、マリアンナと暮すのだが、そのとき マリアンナの夫が時々通ってきて あるとき皆の前で まことに興味深いヴェニスの逸話を語った。それをホブハウスが書きとめていたものをバイロンが詩題材としてこの《ベッポー》を書き上げた。

航海に出た夫に蒸発され、妻は 音信が絶えた幾星霜を待ち侘び 待ちきれず 遂に第二の夫を迎えて幸に暮していると、突然、行方不明だった夫が帰ってきて 元のさやにおさまるといふ茶番劇として書かれている。

ところで 1817、8月のこと、バイロンがホブハウスと馬で遠乗りに出かけ

たとき 多数の田舎娘に混って美しい娘を見初め 早速デートを申込むと、
「あたしは結婚していて パン屋の夫は とても やきもちや だよ。それでもよければ会ってあげてもいいよ。」と返事したのでバイロンは早速、この女と契^{ちぎ}りを結ぶ。

マルガリータという22才の美しい若い女で全くの無学な、だが、機知に富み野性美に溢れていた点にバイロンはとても興味をひかれた。 後で この女がマリアンナと一騎打ちしてマリアンナを追い出しバイロンの許可なくバイロンのヴェニス^のの＜モチェニーゴ御殿＞に居坐ってしまうのだが前述の《ベッポー》のヒロイン、＜ローラ＞なる女性は 実は このマルガリータとマリアンナとの合成物である。

以上 述べてきたような背景的事情 即ち追放後のバイロンが明るいイタリーの太陽の下で自ら人間を改造し、その変った心境のもとで自らの詩風を意欲的に変えようとして 1817年秋 9月より《ベッポー》を書き始めて翌年1818（30才）2月28日 出版の運びとなった。

2. Byron 詩における《Beppo》の位置づけ及び 詩風について

《ベッポー》には 祖国を追われたバイロンの哀しみ、自嘲、絶望、呪い、せせら笑い、願望、決意、抱負が 随所に散見できる。ストーリーの進展があってなきが如く 脱線しては、いわゆる、茶の間^のの話題として 母親が小児に話してきかせるような口調で こっけいに皮肉も混えて たのしく 聞かせてくれる。

アービング^の W. Irving の《リップ・ヴァン・ヴィンクル》 獅子文六の《自由学校》の五百助 漱石の低徊趣味文学の《坊ちゃん》を 楽しむムードに誘いこんでゆく。

しかし バイロンは この詩をもって、自分の詩風への自己革命を勇気をも

って試み 敢えて断行した。 一か八か 賭けて 見事に成功した。

バイロンは <胸につかえたものを吐き出さねば 自分は狂う> といって矢継ぎ早やに 終生瞬時も休むことなく詩い続けた。 だから バイロン詩は 澱んだ水の腐るのとちがって常に流動し 激しく強く律動的に、瞬時の心の揺れが吐き出されていった。

波乱万丈のバイロンの生涯そのものは ^{トローケー} 強弱格であった。 しかし バイロンは、^{アイアムビック} 弱強格のミーターで唄うのが好きだったロマンチストである。だが、この作品を転機として バイロンは諷刺詩人へと自らを変えた。 それは作為的であり、だが所詮は彼自身のもって生れた資質の芽吹いたものだったと云い得よう。

《ベッポー》は ^{アイアムビック} 弱強、^{ペンタミター} 五歩格、^{アクティヴ} 八行連、^{モック} abababcc 詩型によって mock heroic^{ヒロイック} としてうたわれている。 バイロン自身の発明によるものではなく、イタリアの詩人プルーチ、カスティ、ベルーの影響をうけたとしても、バイロン自身による、かなりの創意工夫がなされている。

この詩型 ^{アイアムビック} アターヴァ。^{ペンタミター} リーマ、Iamhic Pentameter がイタリアで ロマンティック ナレィティヴに 用いられたものが 16世紀に英国に輸入され一時跡絶え ^{とだ} 19世紀バイロンがこれを復活した。その功績は高く評価されなければならない。

最初《ベッポー》は 84連で 後に99連として改作、工夫している点。さりげない筆運びに むしろ この詩型にかけたバイロンの抱負がありありとうかがえる。

特に最後のカ^{二行連}プレット CC が

1. 前6行 ababab と遊離しない配慮、いや
2. むしろ さっと 故意に切り離して

- イ. ハッと驚かす、とんでもない、意表をつく結び方
- ロ. ガラリと調子を変えて、急に真面目になり、厳しい口調となる
- ハ. おだてられ喜んでいて、急に足をすくわれて《デカメロン》のヒーローの如く糞壺にたたき落されるような痛烈な諷刺を全身浴びせられる。

その技巧がとても素晴らしく拔群である。こうした悪戯^{いたずら}は バイロンの十八番であるが、この技巧に加えて最後の CC の押韻がとても、すばらしい巧みを見せつけている。つまり、女性韻を随時随所に使用し、しかも、諸者の意表をつくことばで 時には 英語と、バイロンの得意なイタリア語とを用いて互に押韻させ、無造作、無作為の如くみせ、だが、ここに 創意工夫^{こま}の細やかさははっきりと感じさせる。

水を得た魚のように この詩型に バイロンはとびついた、そして、これこそくわが性分に適った理想的詩型>として雀躍りして これをあたかも、伝家の宝刀の如く ふり廻すことになった。——以後の傑作 《審判の夢》《ドン・ジュアン》において。

しかし、バイロンが この詩型にたどりついた過程において 実は——

バイロンは いつの頃からか——勿論、1816、4、25（28才）の追放、流浪後——自分の詩風に 嫌気がさして 詩風を変えたいものと切望し その為、悩み、苦しんでいた。

《チャイルド ハロールド 第四編》 《マンフレッド 第三幕》 はかなり苦しんで 書き上げたようである。その理由として

1. 祖国を追われた寂しさと虚無感——バイロンは口癖の如く、<名とは何。所詮、人の世は空なり>と述べた、あの虚無感——に悩まされ続けたこと

2. 自分の詩風への倦怠感に襲われたこと
の二つが考えられる。

イタリーでの生活に ようやく慣れ馴染んでくると 猛然と＜心のほねっ返り＞を求めた。

——俺は 暗い。読者の心の中にある ^{バイロニック ヒーロー}Byronic Hero は いつも＜華麗だが 憂愁な影＞を曳きずって登場してくるではないか。もう沢山だ。あきあきした。——と心に叫んだ。

——読者の心の中の黒点、バイロンのトレードマークとなった、この黒点を消し去るのだ。イタリーの明るい太陽のもとで いつまでもだらだらと 今はもう マンネリズムとなった あのチャイルド ハロールド的センチメンタルな詩風を続けるのは あきあきした——

バイロンは自らの詩風に叛逆して決然と自らの心にむかって云い放った、宣言した。

「チャイルド ハロールド 第四編 は 最高の出来栄えだ。だが 僕の、この詩風の詩はもう これで種切れになってしまったよ」と友人たちに書き送って、そして 憂愁の影を曳いた、だが、甘く華麗な 浪漫詩との訣別をはっきりと宣言した。それは——バイロンの頭の切り返しの妙技であり、そして勇氣と決断を示した。

折しも タイミング良くマレーが送ってくれた ^{ジャン フカム フリア}John Hookham Frere の ^{ウィッスルクラフト}《Whislecraft》にめぐりあった。これは イタリーのアターバ・リーマの巨匠プルーチに倣った詩風で詩われた作品であるが、バイロンは これをよんだとき、＜これしかない＞とこれに跳びつき 諷刺詩への転向を決意した。それは 或る意味で神により仕組まれた運命の配剤であったとも云えよう。

《ベッポー》は バイロンの心の投影として叛逆児バイロンの心が生んだ 生まれるべくして誕生した作品であったと言い切ることができよう。妻アナベラが、祖国英国が、バイロンを追放した。バイロンみずからが述べた如く 偉大な詩人は、偉大な詩は 追放された異郷の地において その土壤の中においてのみ生れる。かくて《ベッポー》も、その運命をたどった作品である。

＜儂^{わし}には ちょっとりと 諷刺傾向があるようじゃ＞ と ベッポーはうたう。

《English Bards and Scotch Reviewers》で 噛みついた狂犬のようなバイロンの若き日の、あの、痛烈な諷刺は＜諷刺詩人バイロンの＞明らかな萌芽であった。

バイロンは ^{ポープ}Pope を生涯の師としてその詩風に靡き傾倒し 仰いできたが 《Beppo》によって ^{二行連句}ポープの couplet と 訣別した。一方、しかし、ポープの多くの工夫は採用し続けている。

バイロンが最もしばしば用いた、微妙に、バイロンのものは――

＜格調高く、或いは、センチメンタルに華麗なもの＞

＜くだらぬ、或いは、平凡にして馬鹿げたもの＞

を共に、諷刺的に並列していることである。

そしてその効果を高めるため

＜^{どうけ}道化たライム＞を みずから工夫して、つけ加えている。

バイロンは《ベッポー》の中で 理想の詩型について ＜^{イージー ライティング}easy writing の こと^{わし}がもし 儂に体得できたら また書くよ。どんだん書いて そして売るよ＞ と詩っている。桂冠詩人サウジーへの揶揄である。

脱線を重ねながら 口語体で 道化で 揶揄しながら 気楽にかける、この
アターバ・リーマの詩型が バイロンの到達した最後の理想的詩型だった。

《ベッポー》によりバイロン詩は 第二期に突入し ロマン詩から 諷刺詩
へと、そして 更に《審判の夢》《ドン・ジュアン》へと勝利の行進をけてゆ
く。

3. 《Beppo》の ^{プロット}構想について

《ベッポー》は 前述の如く ヴェニス^のの逸話を題材として詩われたものだ
が、easy wotting の詩風によって 恣意的に脱線をくり返しながら そのス
トーリーを展開してゆく。したがって その筋書は、あってなきが如く、くね
りくねりと自由に展開されてゆく。

むしろ、そのユーモアな詩風、諷刺精神、奇抜なライムに ^{いのち}生命をもつ バ
イロンの、試行錯誤的、ある意味での冒険的、成否を賭けた詩として《ベッポ
ー》を考えると、その成功は実は無作為の、脱線的ストーリーの展開技法に
あった。

その99連の展開及び物語^{ストーリー}を追って見よう――

3. ペ ッ ポ ー の 構 想

連番号	テ ー マ	ストーリーの展開	ノ ー ト
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	カーニバル	〈ざんげの火曜日〉の数週間前、 浮かれ騒ぐ夜が更けるにつれ、賑やかに。(各時代 各民族の)假面、 假装は多種多様 カーニバルの語の意味 (四句節期間) <肉欲を絶つ>	Byr が楽しんだ経験 (愛人マリアンナの投影) このテーマで以下 (27連) うたう
11 12 13 14 15 16 17 18	ヴェニス女	ヴェニスで (この物語設定のとき) どこよりも、どの時代よりも 最盛期を讀 ジョルジオーネの絵 へと連想的脱線 リアルな愛 失われゆく愛 美はバルコニーによりかかる とき最高に。見せたがるのが、あ われ色目をつかい、男をしとめ、破 戒の道を進む、しかし〈随身の騎 士〉の制度があるから (救い) と なっている。 嫉妬はあまりなく、艶やかな証し。 男も遠慮せず女漁り	⑬失恋の追憶 揶揄
19 20	ゴンドラ	〜へと、話題を移す (好都合な割 当として用意され) 〜は、棺にも見える	若き男女の密室 (抱月)
21 22 23 24	ローラ	物語りの始めに、ヒロインとして 紹介 ちやほやされる、男たちから 美しい笑いと色目をふりまく 花 の盛り 既婚女性だから浮気に好都合	⑭さりげなく命名したのではない ベトラルチの愛人の名 純愛のソネット ・マドンナ・ラウラの生によせ る詩・マドンナ・ラウラの死 によせる詩
25 26 27	ペッポ	ローラの夫、ヒーローとして紹 介。〈航海に出て消息を絶つ〉 活力、センスに富む。すばらしい セーラー。正義に厳しい。 二人が別れて数年後のペッポの噂	Byr の愛人・マリアンナ・マ ルガリータをモデルとしてロー ラを (色目を使う女) ⑮気まぐれな命名でなくペンゾ ニー伯爵夫人の C. S. の名
28 29 30	ローラ	二人の最後の寂しい訣別のシー ンの回想 夫の帰りを待つローラの寂しい不 安の描写 だから、〈富裕な伯爵〉を第二の 夫として選んだ	後、通った彼女のサロンで、 テレーザ・グイッチョリ伯爵夫 人を紹介され その C. S. となる。 皮肉屋 Byr が〈運命〉に皮 肉られるのはユーモラス。 女好きの罰あたり?

連番号	テ　　マ	ストーリーの展開	ノ　　ト
31 32 33 34 35	伯　　爵	広い教養 音楽鑑賞では第一人者 絵画, ダンス, 詩作すべてを身につけた才人 誠実, 好色, 魅力的 伯爵のダンディさがローラの結婚観を変えた	
36 37 38 39 40	ギャバリエル セルヴァンティ 髓身の騎士	風習——〈一人の女, 二人の夫〉 アルプス地方 広がりつつある, 英国には及ばぬことを希う 既婚女性 礼讃 未婚女性 蔑視 C. S. にとって女主人の命令は絶対的 (ショール・手袋・扇子もち)	⑥Byr この風習蔑視 ⑦この頃, まだ C. S. になっていない
41 42 43 44 45 46	イ　タ　リ　ア	風土礼讃 英国と比べ イタリア語礼讃 イタリアの女礼讃 地上の楽園として空想的礼讃へと脱線	
47 48 49	英　　国	祖国批判, 自由なき英国への批判 礼讃 それは揶揄, 風刺 政治批判	
50 51 52	詩　　作	脱線してストーリーが進展しないのを弁解 理想的詩作法 ロマン詩と袂別の決意	⑪Byr 自ら苦しみ考え easy-writing 脱線, 風刺の詩 風体を編み出した
53 54 55	ロ　　ー　　ラ	伯爵と取決めをして6年経過 二人は幸せだった。 若き愛はすばらしい。嫉妬は老いた証し	
56 57 58 59	カ　ー　ニ　バ　ル	假面をつけ6週間, (馬鹿騒ぎで きるのは3日だが) ローラーが化粧すると, 最高の貴婦人 假面をつけるから思いっきり乱行 できる 舞踏会のシーン	
60 61 62		英国で失われたもの 自然の力を信じる しかし神は不人情	Byr はコスモポリタン
63	脱線の詩型	への抱負	

連番号	テ ー マ	ストーリーの展開	ノ ー ト
64 65 66 67 68 69 70	カーニバル	<p>の假面の下顔を見たい、ローラの開放的性格</p> <p>ローラの女性達の身なりを批評</p> <p>ローラの男たちにちやほやされる得意顔</p> <p>モラルについて英・仏・比較</p> <p>ローラに、とくに、視線を注ぐ男</p>	<p>Byr の心の投影</p> <p>マリアンナ、マルガリーの投影</p> <p>ベッポー帰る (伏線)</p>
71 72	トルコ	<p>好色なトルコ男の風習(女の扱い)</p> <p>英国の女性との比較。</p> <p>トルコ女の無知は救いの道</p>	
73 74 75 76 77 78 79 80	詩界の展望	<p>流行的詩風への風刺</p> <p>文学的洒落者への風刺</p> <p>作家づらした作家</p>	
81 82 83 84 85 86	カーニバル	<p>ベッポーの視線はローラへ</p> <p>徹夜の騒ぎも終わろうとして</p> <p>ローラの美の礼讃 (ナレータとベッポーをオーバーラップさせて)</p> <p>ローラと伯爵は舞踏会場を去ろうとする</p> <p>3,000人の群衆の退去雑踏罵声忌わしき声野次とび交う退場シーン</p>	脱線後ストーリーを結びへ導く
87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99	ベッポー帰郷	<p>ローラと伯爵の前に出現</p> <p>ローラをめぐる伯爵とベッポーのしづかな対決</p> <p>ローラのおどろき</p> <p>伯爵円満解決の態度</p> <p>ローラの対応</p> <p>ベッポーに対して hen-pecked への扱いよろしくまくしたてる</p> <p>みなりをなおす</p> <p>ベッポーの対応不在中のいきさつ弁解</p> <p>富んだ、そして、帰りたい心はしきりだが</p> <p>敢て危険を冒して帰ったいきさつ</p> <p>殺されるところを機智で逃れた</p> <p>ベッポー元におさまる</p> <p>伯爵、ベッポーの良き友として、うまくやる</p>	脱線をうまく結

ベッポー——ヴェニスの話

ロザリンド ごきげんよう、旅のお方。

いいかね 舌足らずでしゃべり

変った^{みなり}服装をしていなさい。

自分の国の長所^{けな}を貶し 自分の生まれに

愛想をつかし、その顔^{つく}に創った神に毒づけ。

——でなきゃ、ゴンドラにのったと言っても

君を信じないよ。《お気に召すまま》四幕一場

1. わかりきったこと 少くとも 当然だが

カトリックの国では みな

＜懺悔^{ざんげ}の火曜日＞が 廻りくる前 数週間

ひとびとは ^{リクレーション}休養をとり

信神深くなる前に 悔悟^{くゐ}を 贖^{あがな}う

身分の高きものも 賤しきものも

ヴァイオリン^ひを弾き 浮かれ踊り飲み仮面つけ

問えば でてくる ^{そのた}其他の乱行

2. 夜が 黒マントで 空をおおえば

(漆黒であるだけ もっとよい)

刻^{とき}が はじまる 情人ほどに夫は好かぬ

そして 淑女は 枷^{かせ} なげすてて

爪^{つま}先きだって はしゃぎ 彷徨^{うろ}つく

とり囲む色男^{いろお}と くすくす 笑い

湧き立つ唄、ざわめき、咆哮、ハミング

ギター 弦楽器 其他 もろもろ

3. すてき、だが幻想的 あらゆる国の衣裳で

あらゆる時代、国の仮面つけ トルコ人もユダヤも

パントタイムの道化者も 離れ技^{かるわざ}の輕業師^しも

ギリシャ人、ローマ人、ヤンキーも、ヒンズーもいた

あらゆる衣裳—— 坊主^{ころも}の衣は 駄目^{だめ}じゃー

皆が 気ままに 選んでよいが

この地方の坊主だけは からかうな

気をつけろ、きみら、自由に振舞ってよいが、これは厳命じゃ

4. 歩き廻るがよい シャクナゲの花、腰にまき
 コートや ちゃちな ドレスでなく
 托鉢坊主を想わせる 粗末な衣、着るなら
 —それは悪戯と 毒ずかれるだろうが—
 曳きずられるぞ 石炭火の上へ。そして煽^{あふ}られるぞ
 火の川の火を 母親の抱^だく息子といっしょに。
 君らの骨煮る大鍋の 泡冷^さますための
 ミサはあげない。 錢倍出せば話は別だが
5. だが、僧衣以外は 気の召すままに
 着てよい ダブレット、ケープ、マント何でも
 マンモス通りや ラッグ、フェアで、真面目^{まじめ}にふざけて
 きみらが ごまかしぬくときのようにね。
 イタリアにも そんな場所が あって
 もっと きれいな名の やさしいアクセントの場所。
 といえは、コヴェント ガーデン
 といえは、Covent Garden を除いては
 < Piazz ^{ピアッツ} > のような所は思いあたらず、英国では

6. この祭は カーニバルと呼ばれ、その字解は
いわゆる＜肉欲を絶つこと＞を 意味する
なぜなら 周知の この名と行事は、四句節を通し^{とお}
生魚と塩漬け魚で 暮すから。
しかし 四句節を迎える前に 大騒ぎするが
儂^{わし}にはとんとわらぬが 推察するに
駅馬車や定期船で 旅立つ友に
出発ま際に 盃を上げると同じだろう
7. かくて 内欲と美食と 縁絶ち
美味しい肉とも 胡椒の効いたラゲーとも
四句は暮らす 魚料理も素食で
イタリアではシチューに ソースは かけぬから
不平不満の たらたらを
(ミューズ 好まぬ) あくたれを
旅人から きく せめて醤油を紅^{サーモン}鮭にと
子供のときから 食べ慣れてきた ゆえ

8. だから 謙虚に おすすめしよう
 ≪^{フィッシュ}魚ソース の 珍味の かずかず≫
 コックに、妻に、友に命じて、海わたる前、
 ストランド通りまでゆかせ グロスで 買うよう。
 <四句節前 出^で発けるのなら
 なんとか うまく 届くよう 送らせろ>
 ケチャップ、ソイ、 チリ唐辛子にハーヴィソース
 さもなきや、くわばら、四句節中 餓^し死 ぬかも

9. つまり カトリックが宗旨なら
 郷に入れば 郷に従え だネ
 諺どおりに—— もっとも だれも、
 異人さんなら 断食しなくてよい。
 プロテスタントが 病弱か 女なら
 ラゲーも食べて 罪も食え——
 食べて死ぬんだ！ 淫^{みだら}らになれと言わないが
 罰だよ それは まあ そうだネ

10. 謝肉祭が とても道化た 昔日の
踊りと 唄と セレナードと 舞踏会
仮面と 無言劇と ミステリーと そして
枚挙にいとまない もっと多くのことで
はしゃいだ あらゆる場所の うちで
ヴェニスが 最も優っていた
私がこの物語に 着目したとき
まさに全盛だった この海港の 街は

11. ヴェニス女は美しく 昔日と変らぬ
黒い瞳, アーチ型の眉 あまい表情は今も。
昔日のギリシャ風の 目鼻立ちに生写し
古代芸術を現代人が 誤って模写した
チチアーノの多くの ^{ヴィーナス}女神に見える
＜フローレンスの女神が逸品 見たくば見よ＞
バルコニーによりかかるとき, ヴェニス女は,
或いは ^{ジョルジョーネ}Giorgione 描く絵から抜けでたよう

12. 淡い色合、その絵もち、真なる、美なる、最高に
 マンフリニ^{マンフリニ} の館に 出向くとき
 儂にはその絵が最高に美しと思ほゆ、どれよりも
 いかに すべてが 見事な絵でも
 あなたの好みにも 適^あうかも きっと
 だから その絵を そう詩^よんだ
 実は 息子、妻、自らを 描いたポートレート
 すばらしい女の、 生命^{いのち}の恋の

13. 生命溢れる、続^{つづ}く愛 それが理想的愛ではない
 理想美、それも亦 その名に価する美ではなく
 さらにすばらしきものは リアルで
 この美しきモデルが そうだったにちがいない
 購^{あがな}い、乞い 盗みたくなるもの
 それが不可能でなくはないなら一恥をも偲び
 その顔はあの顔を想起させる、苦痛にみつ如^{ごと}
 かつて見た顔、 再びは 見ないだろう

14. 若い日 その顔に 目を釘づけにする
もろもろの形の ひとつ
ああ 折ふしに 見る 美しきもの
瞬時の流れの中で あ^{やさ}の柔しき 優雅
若さ 満開 美 それは 融け合う
回想する名もなき 多くの存在の中で
その行方と住み家は 知らなかったし
わかるまい、地上では もう見られぬプレアデスの如く

15. わしは言った ^{ジョルジョーネ}Giorgione 描く絵のよう
ヴェニス^スの女は美しい 昔も今も
バルコニーから見えるとき 格別に
＜美人は 遠くから眺めるとき 最高に美しいから＞
そこでは ^{ゴルドーニ}Goldoni のヒロインそっくり
彼女らはブラインドから、格子からちらと覗く^{のぞ}。
実に すばらしく美しい、彼女らの多く左様
そしてそれは見せたがる それだけに隣^{あわ}れ

16. 一瞥は色目を 色目は溜息を
 溜息は恋を、恋は私語^{ささやき}を、私語は恋文^{さそ}を誘う
 それは Mercuries^{メルクリウス} の軽いヒールの翼^かで翔ける
 彼女らのふるまいは 行儀よく振舞えぬ故
 それから 悪戯^{いたづら}を キュービッドはしかけて
 若き男女を＜恋＞てふ枷^{かせ}で がんじがらめに縛るとき
 よからぬ逢引^{あいびき} 不義密通
 駈落、破戒の誓い、 失恋 果ては乱心

17. デズディモウナのセックスは とても美しと
 シェクスピアは描くが彼女の貞操^{その}は疑う
 ヴェニスからヴェローナでは 今の日も
 そのような事情は 変らないだろう
 ただし、その頃から 嫉妬にかられ
 せいぜい20才の妻をしめ殺した夫は
 いまだかつて きいていない
 何故なら妻には ＜随身の騎士＞がいたから

18. 夫の嫉妬は (嫉妬のあるかぎり)
すべて美しい艶やかさの 証しなのだ。
オセロのドス黒い悪魔の魂—羽毛のベッドで
女をしめ殺した——とは 異質のもので
ずっと陽気な輩^{やから}にふさわしいものじゃ
結婚生活の 柵^{しがらみ} に倦いたら
そんな妻への義理立てせずに、どの女にも^{ためら}躊躇うことなく
次の女へ、別の男の女へ 思いを 移す

19. ゴンドラを見たことがあるかね？ 見てないかも。
ならば ちゃんと 説明しよう
それは長い屋形舟で ヴェニスでは ふつつ
舟首^{へさき}に彫刻、軽やかな造り、だが引締まって
漕ぎては二人で ゴンドリアと呼ばれる。
黒々とした姿で 水面を滑りゆく
カヌーの中に閉じこめられた 棺^{ひつぎ}のよう
その言動は 誰にも そこでは 解らぬ

20. ゴンドラは長い運河を いったり きたり
 リアルトウの橋の下を さっと過ぎる
 昼でも夜でも舟足は 速く のろく
 劇場をかこんで 黒い群
 かれらは待つ そろいの黒い喪服をきて
 だが哀しみには 縁がない
 なぜなら 種々の楽しみも ^{しぐさ} ときにある故
 葬いの終りし後の れいきゅう車の如く
21. だがわが物語りは 何年か前のこと
 30年いや 40年前 まあ そのくらい
 謝肉祭が最盛期のころだった だから
 あらゆる悪戯 ^{バフネリ} と 仮装があった。
 ある婦人が その仮装舞踏会 ^{ショー} を観に行った
 本名は、俺 ^{わし} は知らぬ 知るよしもない
 だから ^{ローラ} Laura と呼んどこう まあね
 なぜなら さっとその名が 私の詩に飛びこんだから

22. 彼女は若くもない老いてもない そして又
　　＜ある人々＞が＜ある年輩＞とよぶ人でもない
　　それは最も不確かな年代に思える
　　何故なら、その年代の正確な定義はきいたこともないから、また
　　懇願にも わいろでも 涙を流してみても
　　ことばで言えず、書きことばでかけぬ
　　適切に表現し得ぬ年輩
　　それは とても馬鹿げたことだがね

23. ローラは花の盛り 世を最高に謳歌し
　　世も 彼女には 媚びを かえす
　　やさしく ^{もて} 遇なし だから彼女は着飾る
　　どこへ出かけても 最高に幸せ
　　美しい女は 歓迎される客
　　ローラが洩面を つくることなく。
　　満面 微笑をたたえ ^{あいそ} 相想をまいて応える
　　黒い明眸^{ひとみ}で 色目をつかう男たちに

24. 彼女は既婚の女性 それは好都合だった
 キリスト教国では しきたりだから
 ちょっとの過失を 寛大にみのがすのが。
 一方独身女がへまをやると
 <調停期間中に 時機を失せず結婚して
 その スキャンダルをとりおさめないと>
 彼女らは その醜聞^{スキャンダル}に勝てないのだ
 露見せぬよう うまく切抜けければ別だが
25. 夫はアドリア海に 船出した
 そして他の海へも 航海をつづけた
^{フオラン} 検疫 ^{テイーン} 停船期間中
 <つまり 40日の 防疫の用心のため>
 妻は ときおり 屋根裏部屋の高所に上り
 そこからは容易に 船が見えたから。
 彼は ^{アレppoー} Aleppo との 貿易商だった
 その名は ^{ジュゼッペ} Giuseppe, 手短かに ^{ベppoー} Beppo と稱^よばれた

26. 彼はスペイン人の如^{ごと} 薄黒い男
旅で日焼けして だが 恰幅のいい姿。
いわば、製革所で色やけされたごと
センスと活力に 溢れた男——
これほど すばらしい船乗は まず備えぬ^{やと}
そして 厳しさは 彼女の物腰に見せぬが
主義には厳しい女と みえた
そして、とても うちがたいほどに
27. 二人が別れて 数年経った
船は沈んだと あるものは思った
どう大失敗^{へま}してか 借財で首がまわらず
帰郷の心 失せたと 噂もたった。
数人が 賭けた たびたび
彼が 帰ってくるか こないかで
多くの者は＜無一文となり 悟るまで＞
自分の評価を 賭け事で支援するからネ

28. 二人の最後の訣別^{わかれ}は 哀れだったと きく
 訣別^{わかれ}は屢々そうある如く、 まあ そうだが
 二人が あえなくなるやも との
 虫の知らせは 適中した
 <半ば詩的な ある、病的な感情
 わしにも ちらっとおこるのを経験したが>
 彼女が 岸で 哀しく ひざまづいたとき
 彼は このアドリア海のアリアドネー⁽¹⁾に訣別^{わかれ}を告げた
 註(1) <ギリシャ神話> Crete の王 Minos の娘。

29. 久しく待ち侘びて ローラは泣きぬれた
 雑草は茂るままで よいと思った
 彼女は食物も 受けつけず
 夜は独り寝を まんじりともせず
 窓わくも 鎧戸も がたがたとなり
 鉄面皮の家屋破壊者 小妖精の前ではもろい
 そこで 思った 第二の夫をもつのが
 賢明だと 専ら自らを庇護するため

30. 彼女は選んだ夫の代りをく選んでならぬ理由はない
ただ ひたすらに こばむなら 別 >
ベッポーが長い旅から帰ってくるまで
そして も一度自分の変らぬ心の歎びを告げる日まで
女は 男が好きなのに だのに罵る——
世間の口を借りれば 彼は ^{しやれもの}洒落男。
性格のみならず 富裕な伯爵
そして 大いなる寛容を歎ぶ
31. 彼は伯爵で 知っていた
音楽をダンスをヴァイオリンをフランス語をトスカナ語を。
トスカナ語はむつかしい、きみらに教えようとしても、
エトルリア語を正しく話すイタリア人は少ないからネ。
彼はオペラも 批評できた
喜劇や悲劇の特徴も 知っていた
ヴェニスの聴衆は 唄、シーン、ふんい気にはついてゆけぬ
退屈千万！
彼がくセッカトゥラ>と 叫ぶとき

32. 彼の＜ブラーヴォ＞は決定的だった その音が
しずもり返った＜アカ^{音楽院}デミー＞を畏敬の念で吐息させたから、
彼が見廻すとき ヴァイオリン奏者たちはふるえた
まちがえた音律が 探知されぬよう
プリマ・ドンナの美しい音色は 弾みつつも
彼の＜フン＞という 罵りを怖れつつ
ソプラノ、バス、コントラアルトさえも
リアルトの橋の下で 彼が5 尋も沈みゆくを望んだ
33. 彼は即興詩人のパトロンだった
いや、自身、小節を 即興的につくることができた
ライムをあわせ、唄い物語りを 語り得た
絵を売り ダンスも巧みだった
イタリア人が そうである如く
もっともフランス人には、かなわぬが
要するに、彼は完全な騎士
彼の従者にとっても ヒーローに 映った

34. 彼は誠実であり 好色でもあった
だからどの女性も 不満を訴へなかった
もっとも ときおり ちょっとは騒ぎ立てられても
彼は美しい女性を 苦しめたことはない
彼の心情は 我々を 夢中にさせ
いうなれば、うけいれる蠟 変ることのない大理石だ
彼は古風に操を守り 愛人として
人が冷やかになるとき いっそう不変だった
35. あたりまえのことだが、この教養が変えたのだ
かしこく、しっかりものの女性の考を——
ベッポーが帰る希みも 消えて
法的に 彼は死んだも 同然
いささかの関心も送らず手紙もかかず
それでも彼女は さらに数年まち続けた。
現実には、男が生存の音信を絶つとき
彼は死んでいるのだ——いや、当然そうだ

36. おまけにアルプス地方では 女性はだれでも

(神のみが知る 哀しい罪だが)

二人の男をもつことが 許される のだ

誰がこの風習をもちこんだか わからぬが

＜随身の騎士＞は 至極 ふつう

誰も 気にはとめぬ いささかも

そして我々は これを (最悪とはいわぬ迄も)

最初の結婚を墮落させる第二の結婚とよぶ

37. この語は昔は

^{チチズベオ}
＜Cicisbeo＞と言ったが

今は俗化して 下品となった

この者をスペイン人は^{コルテホ}＜Cortejo＞とよぶ

同じ様式が ごく最近だが スペインにもあるのだ

ポー河から^{タホ}Teio 河まで この風習は及ぶ

そして遂には海をわたるかもしれぬとしても

古き英国には伝わらぬよう 神よ守り給え！

さもないや、損害賠償と離婚は どうなりゆくか？

38. だが 儂はなお思う、あらゆる正当な尊敬をもって
人類という創造物のうち 独身女性よりも
既婚女性が 当然じゃが 優る
密談でも 一般会話でも
このことは 格別 英、仏、其他の国で
とりたてて 言うのではないが
既婚女性は世間を知り気楽に構え
自然体であるから 当然 気に入られる

39. 花も蕾の娘は、きれい、いかにも惹きつけるが
咲き初めしころは 羞らいて ぎこちなく
おどおどしていて 用心深い
クスクス笑いと赤面と——半ば生意気、膨れつ面。
母親をちらりと見ては 危害を思うて不安顔
あなたが、自分が、それが、彼らがしている事で。
口にすることは 子供部屋のカタコト
おまけに いつも 乳臭い

40. ^{カヴァリア}＜随 身 の 騎 士＞^{セルヴェンテ}は 最上流社会の使用語
 定員外の奴隷を 表わすための
 レディのドレスの 一部としてネ
 身近く いつも つきそう男
 女主人の言葉のみ きかねばならぬ唯一の掟
 彼の仕事は 閑職ではない、意外と
 馬車、召使、ゴンドラを手配するのだ 彼が凡てを
 扇、衿巻、手袋、肩掛、捧げもつのも 彼の役

41. 罪深き所業のかずかず さりながら
 住みよきところ イタリアは ^{わし}儂に
^ひ太陽の毎日上るを 見るを愛し
 ぶどうの蔓が（壁に釘づけでなく）樹から樹へ
 花網で飾られていて 劇のメロドラマの
 背景に似て 観衆は群なして見物する
 そのとき一幕は 踊りで 終わる
 南フランスそっくりのブドウ畑の中で

42. わしは 好きなのじや 秋の夕の遠出も
馬丁に 確めなくてよい
わしの外とうを 腰に巻いてるか
空模様が不安だからとて。
また わしは知っている もし途中で足止めくえば
そこでは緑の小経の九十九折は 魅力的
赤馬車はブドウをつんでふらつき 道を塞ぐ
英国では それは 糞 芥の荷馬車だが

43. わしはベカフィーカ⁽²⁾の 美味がすき
日没^{いりひ}を見るのも好き きっと明朝^{あす}も太陽^ひは上る
酔漢^{よいどれ}の空虚^{うつろ}な目^めの如^{ごと} 感傷的哀しみを弱々しく
瞬きながら 霧の朝からでなく
満天^{まんてん}を独占^ひして 太陽^ひは上る日は明ける
一点の雲なく美しく 明滅する一文蠟燭^{もんめつ}の
灯^{あか}りを 借りずともよい ロンドンでは
悪臭^{あくしゅう}を放ち煙る大鍋がぐつぐつ煮えてるが。

註(2) うぐいす科の鳴き鳥。イタリアでは美味として珍重される。

44. ラテンに似た^{やさ}柔^やしい言葉が好きだ
 女のキスに似て 溶けゆくことば
 縋^{しゆす}子^こにかかれる 響きをつたえ
 甘い南国の息吹の音節を運ぶ
 優しい流音は ^{すべ}滑るが如く
 ひとつの訛^{なま}り 瀟酒にくだけ
 粗い北国の口笛の ブップッ ベッ ベッ
 シーシー 唾吐き ガラガラ鳴ると^{ちが}異^{ちが}って

45. 女も好きじゃ (^{わし}儂^{わし}を許せよ)
 豊かな農婦の ^{あかね}茜銅^{ほほ}色の頬
 大きな黒瞳^{くろめ}は ^{ひかり}閃光^{ひかり}を放ち
 百万言^{こころ}の思慕^{こころ}を 投げる
 貴婦人の高き額^{ひたい}は 愁ひ
 澄みいて^{きよ}淨く 激しく凝視^{みつ}め
 唇^{おもひ}に情^{おもひ}を 瞳^めには心を
 この風土^{つち}の如^{ごと} 柔^{やさ}しく空^{ごと}の如^{あたたか} 滋^{あたら}い

46. いまだ樂園なる郷^{くに}の イヴよ、佳人よ！
汝は 汝の抱擁の中に死んだラファエル⁽³⁾に
イタリアの美を 鼓吹しなかったか
彼は我々が神について知り、希みうるすべてと競う
彼は いかなる点で 我々に遺産を残したか。
その堅琴の白熱^{ひらめ}の閃きからだとしても
汝の昔と今の輝きを どのように述べることができる？
カノーヴァ⁽⁴⁾には だが、できよう

註(3) 愛し合っているときに死んだという説あり

註(4) イタリアの彫刻家 (1757～1822)

47. “英国よ我 汝を愛す あまたのきずのあるがまま”
カレーの波に呼びし 言葉は今も胸にあり
話すことが好き書くことが好き充ち足りるまで
政治も好きだ＜今はちがうが＞
出版と驚ペンの自由を愛す
^{人身保護令}
Herbeas Corpus を愛す＜獲得のあかつき＞
議会の論戦を愛す
とくに手遅れにならぬとき

48. 祖税を愛す 過重ならぬとき
石炭のもえるを愛す 兼価なるとき
ビフテキも 愛す なによりも
一本のビールも 目がないほどに
天気も好きだ 雨は別だが
つまり一年のうち 二ヶ月だけ
神よ祝福を摂政王に 教会にそして国王に
つまり愛する 祖国のすべて
49. わが不動の軍隊よ 船をおりた船乗りよ
救貧税、選挙法改正 わが借財も国家のそれも
ささやかな暴動は 自由を示す
ささやかな破産 官報に載る
曇日の天候 冷い女
これもあれも すべて忘れ
われらの栄光を 大いに崇める
だがトーリ党には 借りは つくらぬ

50. しかしローラの物語には——儂にはわかるが
儂の心に 除々に とても退屈になりゆき
読者にも あまりにも不快だろうような
脱線は 罪だから とね——
寛大な読者も 薄情になりゆき
作者の気やすさに 無関心となり
彼の真意は奈辺にと 知ることを主張する—
詩人にとってそれは 辛い 不運な立場

51. 気楽にかける
easy-writing のこつが 儂に会得さえできれば！
気楽に読むとは何？ 儂によじ登れるか
パルナッソス山へ そこで詩神は坐して詩をかく
美しき詩を 完璧に いつも。
いかに即妙に映せるか わしに（たのしい世界）
ギリシア シリア アッシリアの物語を。
そしたら売るよ 西欧的感傷を混ぜてね
最高に美しい東洋趣味の いくつかの見本を

52. だが儂は ただの 無名の詩人
 <最近 旅に出た おちこぼれの洒落男^{しやれもの}>
 脚韻^{ライム}の入門として ウォーカーの辞書から
 学びつつ 漂泊^{さすらい}の詩 うまくかきたい
 それができねば 儂の悪詩は
 当然のことだが 批評家の 餌食さ
 散文に転向したいと 思いつつ 半ばは、
 けれど詩文は今は 寵児一だからそれゆけ、ためらわず

53. 伯爵とローラは 新しい取決めをした
 それは 仲違い^{なかたが}なく 六年間続いた
 とりきめが ときに そうであるよう
 二人は ちょっとの 意見の喰違^{くわい}いもあったが。
 ささいな嫉妬は どうってことなく。
 そんなことで 口とがらせる口論^{けんか}しないものは
 おそらく あまり いないだろう
 身分高き罪人から 下賤のものまで

54. だが なべて二人は 幸せな ペアだった
不法な愛の許すかぎり幸せだった。
この紳士は 滋^{やさ}しく 女は美しかった
その鎖はか細くも 絶ちきるに値せず
世間は二人を 寛大に観た
信仰あつき者だけが 悪魔よ二人を^め召せと願った
悪魔はそうせず しばしば 待って
老いたる罪人たちを 若き罪人の餌食に委ねる

55. しかし二人は若かった、ああ、 若さなき愛とは何！
愛なき 若さとは 何だろう！
若さは導く 歓びを 甘美さを 活力と真実
心を 魂を そして 天上からの凡てを。
だが愛は年と共に 凋^{しぼ}み、気のぬけたものとなる—
少数のものの中で 経験が改善はしない。
それが おそらく 老人がつねに
途方もなく 嫉妬深い理由なのだ

56. 謝肉祭の季節だった <前述, 36節ぐらい
 逆上って述べた> そして そのため
 ローラは身装^{みつくろ}った いつもの如く
 今夜 ボウム夫人主催の 假装舞踏会へ
 出かけることを決めれば きみらもするよう
 見物人それとも ショーの参加者としてネ
 假装舞踏会のここでの 慣習^{ちがひ}の相違は、ただ
 6週間 <假面の顔>が もてることだ
57. ローラは 盛装^{め か}すと <儂^{しやべ}がこれまで喋ったよう>
 比類^{たぐいまれ}稀な 美しい貴婦人だった
 新装^{はたご}なった旅館の 玄関に舞う天使のごと
 新しく出版^でた流行誌^{ファツション}の扉のように 新鮮だった
 すぐ先月から流行ったばかりの流行を身につけ
 多彩で 扉と表題紙の間に 銀葉紙をはさみ
 印刷が ドレスの すべての部分を
 いろいろなことばで 汚さぬようにと

58. 二人は宴会場へと出かけた それはホールで
人々は 踊り 軽食をとり また 踊った
その正式の呼称は 假面舞踏会
だが それは 儂の唄の調にはどうということはない
それは<小規模だが>^{ヴォクソール}Vauxhall に似てるが
ただし 雨が降っても 駄目になることなし
その集いは“入り混って”<この引用句は
こう云っても よいが>“鼻であしらう者たち”の意

59. ^{入り混ったコンパニー}<mixed company>が意味するものは
君自身と友 そして50人以上のもの以外
(澁面をといて 頭をさげられる)
のこりはすべて俗っぽい組、公共の場の退屈者ども
そこで 彼らは<^{ワールド}社交会>と呼ばれる
400人の名士たちに
厚かましくも ^{はやり}流行の視線をおくる
だが儂は彼等は知っていてもその理由^{わけ}は解らぬ

60. 英国でもこれが真相、すくなくとも
 ^{ダンディ}
 Dandies 王朝の間 そうだったが 今は
 たぶん ある 別の 模倣者達の
 階級に取って代られ それが、ああ
 なんと とり返しつかぬほど 衰微したことか！
 流行の煽動！ すべて、その底辺は脆い^{もろ}
 いかに易々と 世界は失はれゆく事か
 愛、戦争によって、 そして時折、霜により、

61. ナポレオンは北方の^{ソー} Thor の神に敗れた
 ソーは冷い鉄槌^{ハンマー}で 彼の軍隊をうち砕いた
 ^{エレメンツ}自然力により前進を^{はば}阻まれた——捕鯨者のように
 あるいは伝説の文法にまごつく初心者のように。
 彼は苦杯を乾した、戦の機^{チャンス}を疑わねばならなかった、いやというほど。
 そして運命の女神は——わしは敢て神を呪いはしない
 なぜなら＜無限＞を 考えるなら
 それだけ＜自然力の神聖＞を信じるべきだからな

62. 神が支配す、現在、過去 そして全くの未来を、
富籤^{とみくじ} 愛 結婚の 幸運^{めぐりあわせ}をわれらに与う
神がわしに功德をつんだ とは 言い得ぬが
神の博愛を 責めはせぬ
損得収支をしめてはいない、まだ、だが解る^{わか} もう
われらの過去^{へま}の失敗を、神がどれほど埋合わせしてくれたか
女神に慈悲をわしは せがみもしない
もっとも 財産を授かれれば 感謝するが
63. 脱線し——また引返す いい加減にしとけ！
この物語は いつも 指間より ずり落ちる
この詩型が、それを望むゆえ 是が非でも
ぐづつきたいのだ だからこそ
この詩型で始めたのじゃ 崩す訳にはいかぬ
だが プロ歌手のように 調子は合わせねばならぬ
この韻律を 完成できたら
また うたうよ この韻律を 亦暇^{ひま}の時

64. 二人は宴会場へ^{リドット} 出かけた
 明日は儂も そこへ 行くつもりじゃ
 ちょっとばかりの うさばらしに、
 というのも焦焦^{いらいら}して 精気を借りたく
 假面^{マスク}の下に 潜む顔を推察^{はかつ} てみたいから
 そしたら 哀しみも 緩らぐにつれ
 儂には解るだろう みつかるだろう
 ある力で 哀しみを 半刻^{ことわり}おくらせる理を
65. さてローラは 進む さんざめく人垣の間を
 目には微笑^{えみ}を湛え 唇には作り笑を浮かべ
 ある者には 私語^{ささや}き ある者には声高^{しやべ}に喋り
 ある者には膝を曲げ ある者には会釈する
 <熱いわねー> と 臆面もあく ぐちる
 伯爵の運ぶ レモネードを 啜る
 それから 凝視して 蔑すむ、なじる、憐れむ
 親しい友の盛装を 野暮ったいわ と

66. カールが 変だわ 口紅が 濃いわよ
^{あなた}貴女ひどいターバン どこで 買ったの？
 あなたの 蒼白い顔 気が遠くなりそう
 あなた^{みなり}身装が下品よ 野暮で 場末のそれよ
 あなた、白いシルクに 黄の シミあるわよ
 あなた、薄いモスリン それ ^{きょうかたびら}経幘子だわ
 ほら もひとり！ 8人目 うんざりだわ
⁽⁵⁾バンコーの王様のよう 20人の^{おぼけ}幽霊ごめんだよ

註(5) 将来王になるはずのバンコーの子孫たちの幻影をマクベスが
 見る箇所をもじる。《マクベス》四幕一場112～8行。

67. ローラが女達を 見つめる間
 彼女らもローラに 視戦を投げる
 ローラは聴きいる 殿方の私語く讃辞
 それが鎮まるまで ほっとけ と決める
 女は^{ひたすら}只管 おもう すばらしき ことと
 花の盛りに ^{ほ はやさ}賞め讃れる のを
 群る^{あまた}数多の男から だが 男は 下品で——
 鉄面皮な女が いつも男の趣味に ^{このみ かな}適う

68. 儂として 今 ^{わか}理解らぬことだが
^{みだ}猥らな女が何故に——あげつらうつもりはない
 この国にとっての スキャンダルを
 だが とても わからぬ 何故 こんなのか。
 ガウンを着て バンドをした坊主となって
 馬鹿騒ぎが 儂にもできるなら
 ウィルバーフォース⁽⁶⁾やロミリー⁽⁷⁾が 次の演説で儂の訓戒を
 引用するまで、このことで儂も お説教ぶつよ

註(6) (1959～1833) 政治家, 博愛主義者

註(7) (1757～1818) 検事次長, 下院議員

69. ローラが視線を浴び 秋波を微笑を饒舌を返すとき
 ともかく 彼女は 傍若無人
 だから女性友だちは 嫉妬に煽られ
 彼女の気取と得意の様を ^{みつめ}じっと疑視る
 身なり良き殿方は 彼女の仕掛けに釘付され
 通りすがりに会釈し 彼女のお喋りに加わる
 只一人⁽⁸⁾だけ誰よりも 余人よりも 執拗に
 視線を投じた 異常なまで しつこく

註(8) <只一人>は今迄消息を絶っていたローラの夫ベッポー。

70. 彼はトルコ人だった マホガニ色した
ローラは彼を見て 先ずは 歎ぶ
なぜならトルコ人は とても好色だから
妻への扱いは 哀しいものだが。
犬コロ同然女を扱う かわいそうだよ
駄馬 買うごとくに 妻を購^{あがな}う
女を多く囲っても 外には出さず
四人までは法が許し 随時に妾をもつもよし

71. 閉じ籠められて被^{ヴェイル}看をつけて妻は終日疵護される
女が男を見るのは 叶わぬ 縁者でも
女がたのしく 過せぬように
北国の慣習と ちがって
幽閉されて 女の顔は とても蒼白
おまけにトルコ人は 長談話をきらう
かくて 女の日々は 無為に過ぎ
入浴、子育て、情交^{セックス} そして縫物がすべて

72. 読めない だから ベチャクチャ不満も吐かず
 書けない だから 詩才を気どらぬ
 警句も機知も 浮かばぬゆえに
 ロマンズ、説教、劇、書評にも 無縁
 女^{ヘレム}部屋での修行は 内輪もめの種
 この美人が Blue^{へりくつ女} でないのは 救いだ
 彼女らはうるさい Botherby^{ボザビイ (9)} を 見なくてよい
 “最近の詩の中の 魅力的あの一節” をね、

註(9) W. Sotherby (1757~1833)。詩劇作家の苗字 Sotherby と
 bother (うるさがらせる) をもじったもの。

73. 軽薄な 古めかしい 韻律の詩をかくお方
 人生をゆがめて 名のみ追い
 時代を ちょっと 半かじりしつ
 なおも あほらしく 漁^うり 続ける
 変りばえせぬ <雑魚^{ざこ}の小海老>
 平凡な莊重 子供の詩人、才女向きの学校の助教師
 こだまのこだま 学校の案内人、
 つまり 阿呆！ はトルコにはいない

74. 潤歩する ^{おつけ}宣託 おそろしい文句の
 満足そうな“結構”！ <法的には 善ではない>
 もえ熾^{さか}る炎の廻りの 蠅のごと うるさい
 見たこともない程の 青蠅の コチコチ
 ひなんし なぶり ほめて ^{いらだ}焦立たせ
 ささやかな名声を ^{なま むきぼ}生で貧る
 文字もわからぬことばを 訳し
 二流の劇も汗して創れば ヘボがそれだけ良くなる^{わけ}訳さ

75. 作家づらした作家は 嫌われ——
 フールスキャップの制服で、奴らがインクをさげ現れ
 渴望，りこう面^{づら}，御立派 妬み顔，
 彼らにどう言うべきか，彼らをどう考えるか，
 さっぱり わからぬ ふいごで吹くより
 気取り屋の中で 最上の洒落男でも
 この半端紙よりは ましだ
 深夜の燈心の くすぶる ^{におい}臭気よりは，

76. 同じ作家に見る幾人か、 また他の各人の中にも
 スコット、ロジャーズ、ムーアの如き、世の中を知るもの
 さらに、優れた同胞達を見る
 彼らは ペンの他の 重要なことも知る
 だが ^強 ^き ^母 Mighty Mother の子供たち、自称のウイット、^オ ^子
 偽紳士 は 儂は 委せるんじゃ
 彼らの毎日の ティーの用意を
 気取った連中 と 頭の高いレディに

77. 儂が口にする 憐れな、いとしき回教徒の女は
 教養好きの めでたい 御仁たちとは無縁じゃ
 そして彼らにトルコ女は トルコ寺院の尖塔
 鐘のよう いらぬものだと 映るだろう
 儂は願う——伝導師作家に 年金をやってほしいと
 <よく蒔かれた計画は 刈入れは悪いのじゃが>
 ひたすら 説教に 精出すから
 わがクリスチャンの ことばづかいのため

78. 化学は女達に気体論を 明かさず
哲学も講義を ゆるめはしない
巡回図書館も 集めはしない
宗教小説 訓話をそして生き態^{さま}への批難を
われらの そばを 通りすぎるとき。
展示会も 彼女らをどぎつくみせず毎年の写真で。
彼女らも 星群を眺めはしない、屋根裏部屋から
数学の扱いは知らぬ⁽¹⁰⁾ (ありがたいことよ)

註(10) 数学者の妻アナベラへの諷刺

79. 儂がそれを神に感謝する理由はどうでもよい
儂なりの理由がある きみらがきつと思う
それは とてもはしゃぐ如きものではないから
散文にして 生涯（これからの）の為にとっておこう
儂には風刺傾向があるようじゃ どうも
だが それは老ゆるほど 叱るより笑いたくなる
と儂は 思うんじゃ もっとも 笑いとは
その直後では 我らを二倍に真剣にさせるが

80. おお陽気と無邪気 おおミルクと水
 汝 よりたのしき時代たのしい混合！
 罪と殺戮の この数世紀に
 忌わしき人間は 和らげえなかった
 その渇きを その淨き飲物で
 二つながら愛す 故に二つながら 讃えよう
 おお なつかしき ^{サトウルヌス} Saturn の御代、^{シュガーキャンディ} 砂糖菓子 の！
 ともあれ、その ^{めぐり} 蘇こむ日の為 ブランディで乾盃しよう
81. わがローラのトルコ人は 彼女に目を注いだ
 回教徒風というより むしろクリスチャン風に
 その眼差しは <私は貴女を尊敬します。私が
^{みつめ} 疑視 ^{よろこ} めて喜ぶ間、止っていて下さい>と訴うごと、
 疑視で女がものに出来れば 彼女は既に彼のもの。
 彼女はしかしまだ ^{なび} 靡かない
 あまりに長く燃えつづけ たじろぎもしなかったローラの目は
 異邦人の 見慣れぬ色目にも

82. 朝が今 明けようとしている
 このときの変わり目 忠告しよう 女達に
 踊ったり なんらかの
 他の行事に 参加している
 さあもう 準備するんだよ 舞踏場とは
 陽が上る前に お暇するんだよ と
 ランプとろうそくが 消えたら太陽のバラ色で
 彼女らの頬の紅潮も 蒼白くみえるからね
83. 儂は若い日 舞踏会と 底抜け騒ぎを見た
 そして 愚かな理由で 彼らと共に過した
 そのとき期待した<それは罪にならぬと希むが>
 どの婦人が この時期 最も際立っているか究めたいと。
 花も盛りの女を 数知れず見たが
 美しい 快い 且つ魅力的歎びを与える
 その中で一人だけ <いつまでも腿せぬ星>
 そしてその輝きは ダンスの後も夜明けに挑む

84. ^{アウロラ}曙光の女神の名を 言っているのではないが
それでもよい というのは 彼女は
儂には神の発明の特許品に 他ならぬ ゆえ
魅惑的女性で 見ただけで楽しい
だが名ざすのは 批難に値するだろう
それにしても こんな美しい彼女を
ロンドンやパリの舞踏会で 次回見つけたら
やはりその頬、溢れる色香に気付くだらう
85. ローラは 舞踏会の 三千人の中に
七時間 坐った後で 夜明けを拝むことが
全く 無意味だと 知りつつも
礼節をつくすのが 正しくふさわしい と思った
伯爵は 彼女のショールをもち 身近にいた
二人は部屋を 出てゆこうとした
そのとき 見よ！ 呪われたゴンドラ漕者らが
禁制の場所に入ったところ ちょうどそのとき

86. ゴンドリアらは ^{イギリス}英国の御者に 似て
おきまりの争いは そっくりで一群衆曳行，咆哮
あごうちくたく ^{ののしり}冒瀆のこえ
ひっきりなしの わめきごえ
英国 ^{ボウ}Bow 街の紳士らは ^{おきて}掟はちゃんと守るが
ここヴェニスでは 呼べば応えて歩哨たつ
だが あちこちでは 罵声とびかい
いやらしいことばが 口^かにされ 飛び交う

87. 伯爵とローラは 自分の船を見つけ
家路へ 棹さす しずかな朝を
すぎ去った踊のことを話しながら
おまけに 踊手や ドレスの事も
ちょっとしたスキャンダルもついでに
だがハッと 驚く ^{やかた ステップ}(館の階段へと漕ぎ進むとき)
伯爵に より添い ローラは坐っていたが
見よ！ トルコ人が立つ 彼女の前に

88. 眉間に 皺をよせ 伯爵は 切出す
 貴殿の不慮の 出現は
 趣旨を説明せねば なるまいか 儂^{わし}としては
 だが多分これは 間違いじゃろう。
 そうあってほしい、 で、お世辞ぬきで
 貴殿のために そう 願う
 儂の趣意がお解^{わか}りかな？ わかってほしい是が非でも
 “貴殿よ” トルコ人は言うた “間違いじゃない”
89. “その御婦人は わわしの女房じゃ” 狐につつまれ
 女の頬^{ほほ}が紅潮しゆくのは 無理からぬ。
 英国女性は 失神しても
 イタリア女性 は あからさまにはそうならぬ
 彼女らは ちょっと 聖者に 祈る
 そしたら われにかえる ほとんど 元^{もと}の。
 ならば省ける、鹿角精も薬用塩も、顔に水かけたり、
 コルセットを切ることも。そんな場合の常として

90. 彼女は言った“私には言葉はない。だって、一言^{ひとこと}も”。
だが伯爵はていちょうに この異人を招じ入れた
耳にしたことで とても^{なご}和んで
“このことは 内々で 話すのが 最上策”
彼は言う “公に 馬鹿さかげんを曝さず
騒ぎ立てず 繰^くり言なしに しよう
さすれば 主な 唯一の満足は
取引のすべてを 擲^や擲^ゆすることでしょう”
91. 三人は館に入ってコーヒーを注文^{オーダー}した——きた、
トルコ人もクリスチャンのどちらも飲むもの、
コーヒーの立て方は ちがうが。 さて
ローラはとても氣をとり直し、語るのを嫌わず
ベッポ^{ベッポ}！ と呼ぶ。 で、 貴男^{あなた}の異教徒の名は？
あら！ ひげがとてものびてるワ！
それで どういうことで、こんなに長く蒸発してたの？
とてもいけないことと 考えなかったの？

92. あなた 正真正銘 今 トルコ人なの？
他に女は 娶ってないの？
トルコ人は フォーク代りに 指を使うの？
ふーん、それ きれないショール、私の様、 活気あって。
それ、私に頂戴？ あなたたち豚肉^{ポーク}は食べないそうね。
そしてそんな長い間 よく あなた辛棒できたわね。
とんでもない、私が、できたかって？ いや、
こんな真黄色^{きいろ}い男みたことない！ あなたの肝はどうなってるの？

93. ベッポーその髯 似合わないワ
剃りなさい もう一日も伸びぬうち
なぜ伸ばすのよ あ、忘れてた
ねー、ここはより寒いと 思わない？
^{あたし}私 どう見える？ もうここから動いちゃいけない
そんな変な服きて 誰かにみつきり
正体を看破られ ばらされるわよ身の上を
頭髪が短かいよ、おや！ すっかり白いじゃん

94. この要求にベッポーがどう^{こた}へたか

農にはわからぬ。 彼が投げ出された処は
昔のトロイの辺り, 今は何もない
むろん奴隷となって そのペイとして
パンを恵まれ苔刑をうけた そして遂に
海賊一味が近くの湾に 上陸したとき
ベッポーは一味に加わり 栄え それから
名声に無縁の 背徳者となる

95. だが 彼は富み 富むにつれ

帰郷の心 しきりだった
彼は思った それが^{つとめ}義務であり
大洋での掠奪を 常としてはならぬと
ときどき寂しさに襲われた ロビンソン・クルーソー のように
そこでスペインからの船をやとった
コルフ島へ向かうもので すばらしい三本マスト帆船で
十二人が乗組み 煙草を積んでいた

96. 自分と多くの現金キャツシユを積み（入手経路は 不明）
 生命と身体の危険を冒し 乗船し
 見事、脱出しえたが 向う見ずの冒険だった。
 彼は言った <神の庇護の賜だったと>
 儂としては何も言わぬ——意見が割れぬよう—
 そうさ— その船は こぎれいで
 出帆して、かなり 順風で走った、ずっと
 —ただ ボーン みさき Cape Born の沖合での、三日の風' 以外

97. 島につき 積荷と自分と、
 生きた家畜と 別の船のに移った。
 そして種々さまざまの品 <儂は品名は忘れた>を
 商う 正銘の トルコ商人で 通した。
 うまく、こうして、言い逃れたが
 でなければ うち殺されたろう
 かくてヴェニスに上陸し 彼の妻、宗教
 クリスタンネームの 取戻しを要求した

98. 妻は要求を容認^{みとめ}めた 大司教は彼に再び洗礼した
ついでだが、彼は教会に、贈り物をした
それから 変装の衣服を 脱ぎすて
伯爵の半ズボンを 一日 拝借した
友人達は 長い蒸発故 かえって大切に遇した
それは彼に 陽気にはしゃぐ銭があると知って
ディナーを共にして 彼は皆の酒の肴となった
物語としては——半ば眉唾ものと儂は思うが

99. 若き日の苦しみが 多かりしとも 老境は
富み語らいあれば 変りゆくもの
ときどきローラは 彼を激怒させるが
伯爵と彼は いつも 友人同志ときく
わが 詩筆も もう 終らんとして
頁の余白もつきたので ここで物語は結ぶ
もっと早く 終らむと 望みもしたが
とにも角にも始まれば 物語の終りは長びくものじゃ

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis
Prints.
- 3) Leslie A. MArchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。